

2.12 その他の遺跡

以上のほかに、縄文時代の遺物を出した遺跡を簡単に説明しておく。

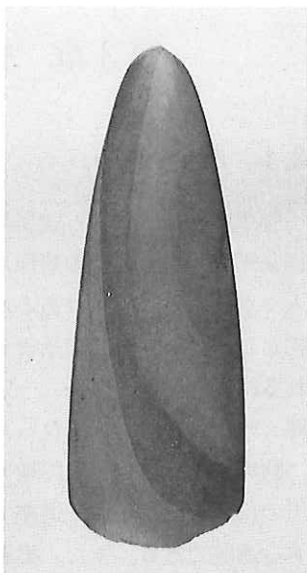
昭和58年に、辻遺跡の一角かとも考えられる地点で小学生によって石斧が採集されている。県道工事に伴う確認調査の範囲外から工事中に出土したもののようで、工事中の排土のなかから発見されている。遺物は磨製石斧で、全長17.8cmあまりを測り、ていねいな作りであった。

昭和62年、香住住宅団地の造成工事およびほ場整備事業に伴って、井走遺跡の確認調査が実施された。遺物検出面のより下層から縄文土器片の出土があった。広い範囲で調査を実施すれば、あるいは遺構の確認もあるかもしれない。山裾に広がる微高地状の地形に立地しており、縄文期の遺構は確認していないが、文様は不鮮明ながら早期後半と推定される楕円文が認められる破片や、後期のものが散見する。

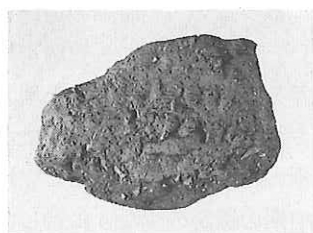
日高町水上遺跡で出土したのも、同様に楕円文を配する早期の土器片であったが、本例とともに早期の遺物が低地で出土しているケースとして注目される。

奈佐地域の^{たいらいじ}大平寺遺跡でも工事中に若干の縄文土器片が出土しており、但馬地方に多い高原性の縄文遺跡の例かもしれない。すくなくとも神鍋遺跡や辻遺跡との関連が注目されよう。

なお、これらのほかにも奈佐地域で内町遺跡、八条地域では女代神社遺跡、新田地域では木内黒中遺跡などでも縄文時代の遺物が出土している。



写16 辻遺跡周辺採集の石斧



写17 香住井走遺跡の押型文土器

第3章 弥生時代の遺跡と遺物

3.1 あらまし

弥生時代は、コメと金属器使用の新しい文化の時代として把握できる。縄文時代がわれわれの想像以上に高い生活文化をもっていたことは多くの人々が説くところではあるが、自然に積極的に働きかける本格的な栽培食物としてのコメ作りの始まり、鉄器・青銅器という金属器の使用に代表される裕福な階層の成長、一定規模の墓の構築など、いくつかの点で前代の縄文時代と根本的に異なった時代である。

駄坂川原遺跡は、但馬地方でも最も古い弥生遺跡のひとつである。六方川の川底で確認された遺跡であることから分かるように、低湿地に立地する遺跡である。また、実態は不明であるが前述した加陽地区の天神橋の約100mあまり上流で採集された土器片や九日市上町の女代神社南遺跡出土土器の一部には、前期の遺物が含まれるようである。

数少ない古い時期の遺跡は、こうした低湿地に散見するだけで多くはない。中期になっても豊岡市域の弥生遺跡は活発な動きを示していない。石斧や石剣などの石器出土地、気比銅鐸出土地などでいくつかの遺跡が確認される程度である。後期になると、例えば先に述べた宮井遺跡のような山裾の遺跡や小さな谷部に立地する遺跡が多く見られるようになる。前期・中期の遺跡の少なさに対して爆発的ともいうような遺跡の数の増加である。これは、遺跡発見の機会すなわち工事や発掘調査の量の差というのみでなく、遺跡の絶対数の差と考えるべきであろう。

ここでは、調査の進んでいる墳墓群の調査例を多く述べることになるが、順序として生活址などを先に、後半で墓の調査例について詳細に検討することにしたい。すでにふれておいたように、丘陵地の調査が先行している市域では、低地の遺跡発見は今後の大きな課題である。取りあげる遺跡の詳細な時期は議論のあるところであるが、ここではいわゆる「庄内期」の遺跡も含めて扱っている。

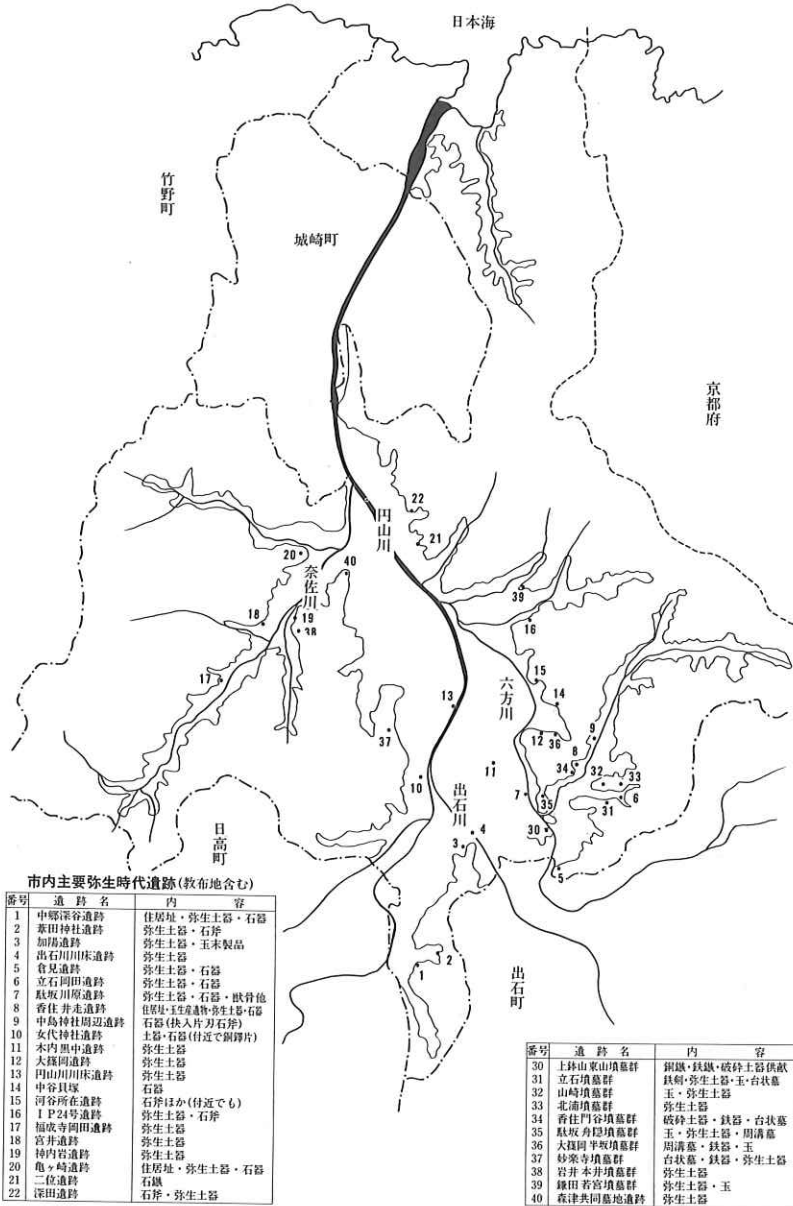


図39 主要な弥生遺跡分布図

3.2 駄坂川原遺跡 駄坂字中川ほか

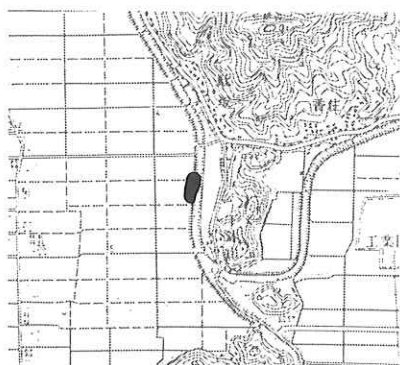


図40 駄坂川原遺跡位置図

契機 発見の契機は、昭和55年、六方ほ場整備事業に伴う遺跡分布調査の際、堤防斜面から多数の土器片などを発見したことによる。この時の遺物は昭和51年の六方川しゅんせつ工事によってあげられた土砂に含まれていたものであった。遺跡の実態は不明なままであったが、57年になって市の調査員らが川底の踏査をおこない、上地橋上流の川底に包含層が

露呈していること、その範囲が南北約80m前後であること、貝層が3か所程度に存在することなどが知られた。

62年に、ほ場整備に伴う確認調査で兩岸の水田にテストピットをあけたが、土質の条件が悪いためもあって必要な深さまでのデータが得られなかった。また、63年、同様のしゅんせつ工事が下流から進められてきたため立会いをおこなったところ、上地橋より下流には遺跡の広がりのないことが判明した。

平成元年、工事が遺跡範囲に及ぶことから立会い調査を実施し、試験的に10か所程度を重機で深掘りしたところ、貝層を伴う遺跡の存在が明らかとなった。弥生時代前期から中期にかけての土器・石器・木器などの遺物群および獣骨・貝・魚類・木の実などの良好な遺存状態が注目され、稲作開始期の拠点集落の実態が知られることとなった。また、これにあわせて実施した水田部分の再確認調査によって遺跡の範囲もようやく推定可能となっている。

立地 遺跡の本格的な発掘調査はされていないが、上記のような経過を経ておおよその状況が判明してきた。それによると、遺跡は三開山の南山裾にあたる部分からおおよそ200mの位置にあり、標高は付近の田面で2m、川底では0mにすぎない。

当初の理解では、東の山裾から続いている台地上の地形にのった遺跡と考えられたが、確認調査の結果等を総合するとむしろ低地部に単独に立地し、山側にかけては安定した地盤も存在しないらしいことが判明している。すなわち、自然堤防ともいえる微高地上に南北に細長く立地する集落で、東側には后背湿地が形成されていたらしい。遺跡の広がりには南北約120m、東西50~60m程度と推定される。

確認調査のテストピットや川底の深掘り地点は合計26か所となる。これからは住居址や溝といった明確な遺構は検出されていないので、貝層について述べておくことにする。貝層はやはり南北に細長い範囲に広がっていて、推定の規模は50m×20m程度になる大型のものである。ヤマトシジ

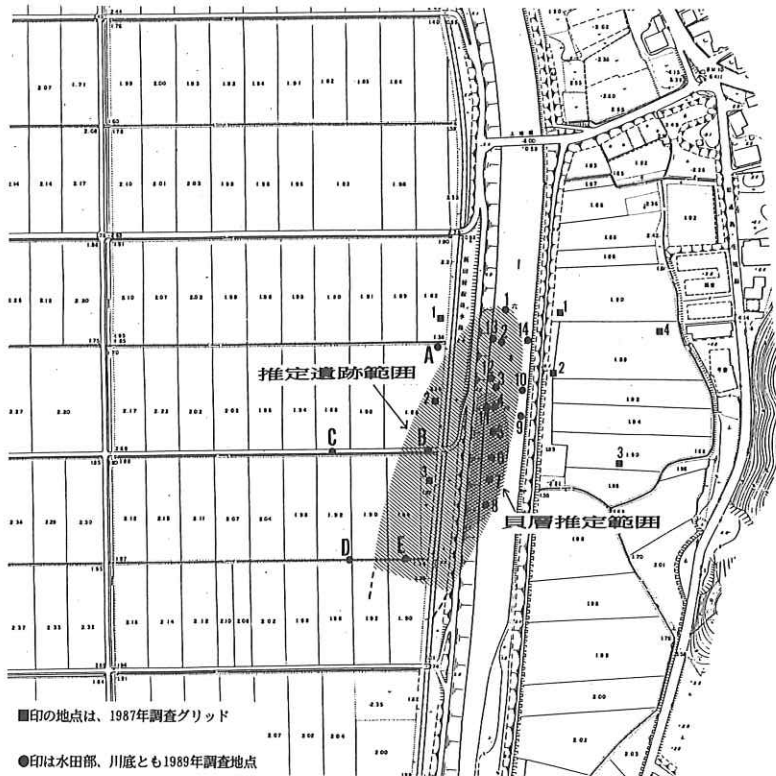


図41 駄坂川原遺跡範囲想定図

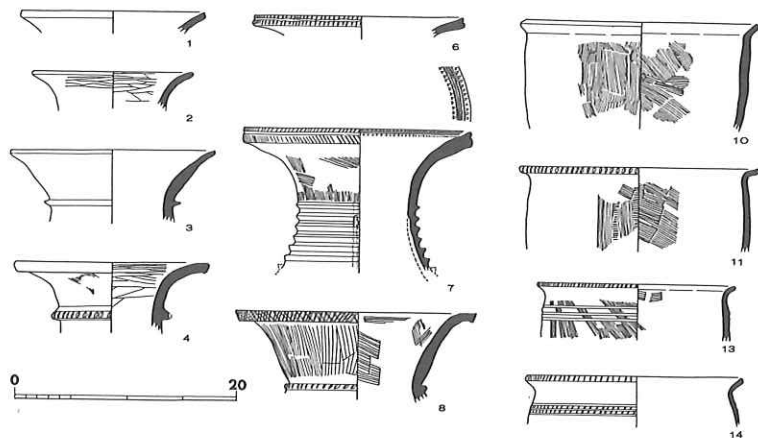


図42 以前採集の土器実測図（駄坂川原遺跡）

ミとマガキを主体として、厚いところでは約 80 cm の堆積が認められる。低湿な条件にめぐまれて貝層中の自然遺物は驚くほど良好に遺存している。遺物 遺物は、まず人工遺物として大量の弥生土器をはじめ、石器・木器・骨角器・土製品がある。注目される遺物が多い中で、骨角器類の釣針・ヤス・腕輪・牙玉・弭（ゆはず）は代表的である。木器では、鋏・鋤・斧の柄・鉢形容器・スプーン未製品・ヤスのほか、同心円文様を彫刻して赤色顔料を塗布した用途不明の蓋状木製品がある。また土製品には土錘・紡錘車のほか、当地では初の陶けん（土笛）の小片が出土している。

土器は、前期中葉から中期前半にかけてのもので器種は壺・甕・鉢にほぼ限定される。まず、壺の形は口縁部があまり外反しないもの、筒状の頸部から大きく外反するものなどがあり、口頸部との境および胴部に削り出しによる段をつくりだしたものも多い。文様は、ヘラ描沈線文・貝殻腹縁文や1〜3条の貼付突帯、削り出し突帯などが認められ、またヘラ描の羽状文や三角刺突文・綾杉文・棒状浮文・半載竹管文・櫛描直線文や波状文を配するものもある。

甕は、短くゆるやかに外反するいわゆる如意形の口縁部をもつものや、くの字に外反するもの、逆L字形を呈するものなどがみられる。文様はやはり篋描沈線文が多用されており、削り出しによる段や刺突文、口縁端の

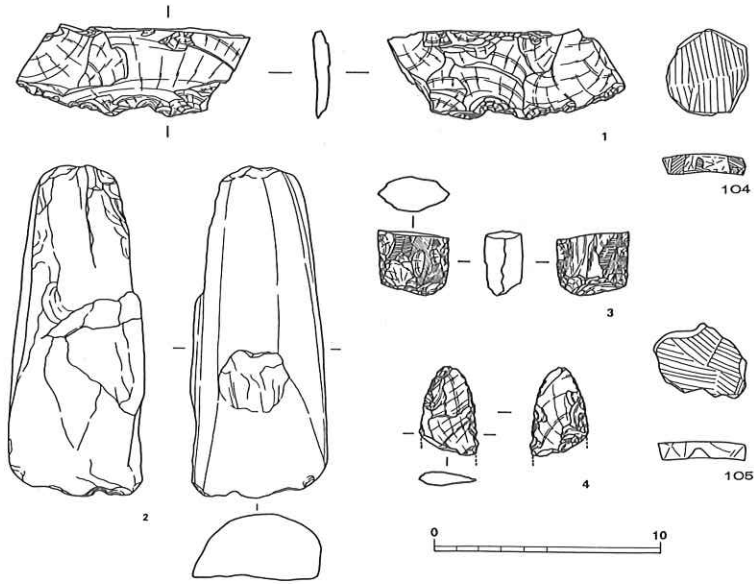


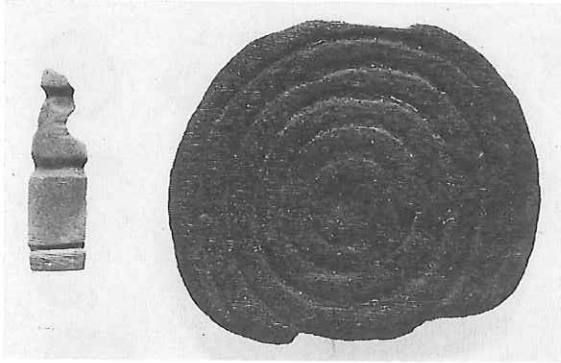
図43 以前採集の石器実測図（駄坂川原遺跡）

刻目などがみられる。土器は前期後葉に属するものが多く、まとまった量の出土例として当地方の様相を知る基準的な資料である。なお、土器の底部に靫の圧痕をとどめるものが4、5点ある。

石器は比較的出土量が少ないが、磨製石斧・断面が菱形を呈す磨製石剣の基部・石鏃・石鏃ないし槍先・石錐・石包丁？などがあり、碧玉の原石や石鋸状石器が伴出していることから玉生産の存在も確実視される。

次に自然遺物では、貝類がヤマトシジミ・マガキ・ハマグリなど約20種ほど確認されている。またトチ・クルミ・ドングリ・カヤ・クリ・モモなどの木の実やヒョウタン、獣骨ではシカ・イノシシなどがある。さらに魚類の骨・うろこ・えらといったものまで良好に遺存し、昆虫の羽も見つかっている。今後詳しい分析がおこなわれると、食生活や古環境復元の重要資料となろう。

まとめ 土器の形態や文様からは、弥生時代第Ⅰ様式中、新段階・第Ⅱ様式に属するものが多く、一部に第Ⅲ様式期のものが含まれる。いまのところ



写18 駄坂川原遺跡出土同心円文木製品・弓筈

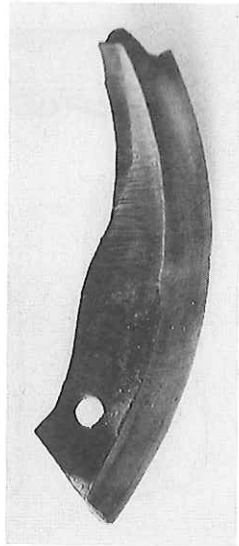
縄文晩期の土器は伴出していないことから、豊岡盆地に本格的なコメ作りの村として最初に成立した拠点集落とみられる。おそらく盆地の弥生社会をその後当分の間、リードしたムラであつたらう。

完成された形態の農具などには本格的な稲作の展開をよみとれる一方、貝塚の形成や骨角器類には前代の縄文的な要素も多分に残っているなど、きわめて多様な生業の実態も浮かんでこよう。

碧玉原石や原石切断に用いる紅簾石英片岩、あるいは中国大陸に起源をもつ土笛の「陶げん」片の出土も、本遺跡が出雲から丹後にかけての山陰地方に独特の文化圏に含まれることを示している。いずれにせよ、本遺跡は、日本海沿いの初期農耕集落の実態と当時の古環境解明に重要な手掛かりを与えてくれるものである。

縄文時代の中谷貝塚、その付近の自然貝層の存在、やや離れて長谷貝塚や荒原貝塚(?)といった駄坂川原遺跡をとりまく付近の遺跡群は、縄文から弥生時代にかけての環境推移を知るモデルゾーンともいえよう。

なお、直線距離にして約200mの丘陵上の駄坂舟隠遺跡で検出された方形周溝墓群は、時期的に川原遺跡と重なっているため、この拠点的な集落の墓地として位置付けられることは確実視される。現状では、但馬・丹後地方の最古級の墓地遺跡である。次に説明する。



写19 駄坂川原遺跡
出土獸牙製腕輪

3.3 駄坂舟隠遺跡 駄坂字舟隠など

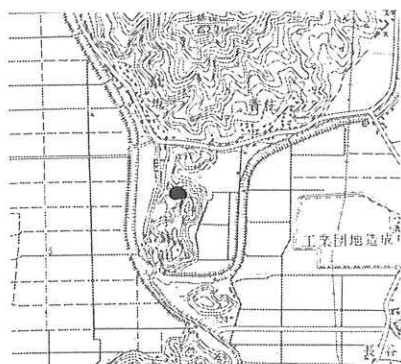


図44 駄坂舟隠遺跡位置図

契機 豊岡市域の宅地の需要増に伴い、民間の事業として宅地開発事業が計画され、事前の分布調査によって遺跡の存在が明らかとなったため、昭和63年に事前の発掘調査が実施された。

古墳を主体とし、弥生時代中期の墓群や中世の砦の曲輪の一部などを検出した遺跡であるが、ここでは当地では最古の墓遺構の検出となった

弥生時代中期の墓群の状況について説明する。

立地 遺跡は、三開山から幾本か派出している小さな尾根のひとつに立地している。尾根がいったん高さを低めた所に峠（県道）が通っており、そこから再び高さを増しながら南の下鉢山方面に尾根が続いている。標高40m前後を最高所としている。

遺構 遺跡全体の状況は、図40のように古墳を主体として中世の砦関連の遺跡とともに古墳の下層に弥生時代の方形周溝墓がある。検出された遺構は次のとおりである。

2号墳下層から、古墳時代に属する3基の埋葬施設によってその一部が破壊され、また大量の盛土を調達するために周辺部を削平した際に縁辺部が破壊されてはいるものの、盛土によってきわめて良好な状態で方形周溝墓の残存が認められた。

確認された周溝墓はすくなくとも4基あるいは5基以上で、周溝を原則的に共有しており、そのなかに埋葬施設が1基ないし2基造られている。

溝が完周して検出される例は上の事情からなかったものの、状況から判断すれば当然完周したのであろう。

注意されるのは、第6主体で軟質な碧玉製管玉多数が出土し、また第9主体で石鏃が検出されたことである。おそらく但馬地方最古の管玉という

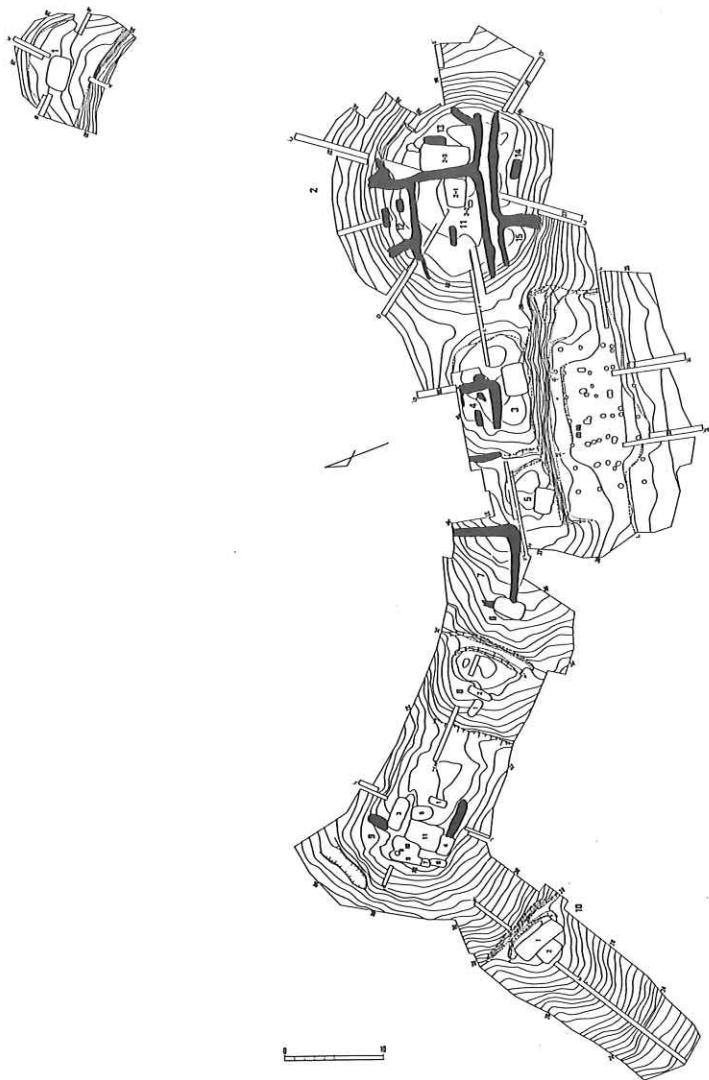


図45 駄坂舟隠遺跡の遺構配置状況



写20 舟隈2号墳下層の方形周溝墓

ことになろう。

4号地点は、3号墳北側で検出された墳墓で、後の3号墳および曲輪、さらに3号墳と2号墳の間の区画溝などによって分断されているが、2号墳下層のものと本来は一連の墓群ではないかと観察される。中央の埋葬施設は木棺で、棺内の底の部分から石鏃が出ている。

石鏃を副葬していたのは、1.6 mに80 cm程度の大きさの墓壇内に、長さ1.2 m程度に組み合わされた木棺であり、また、第2主体と呼んでいるのは、小さい墓壇に直接遺体を入れ、それに石で蓋をしたいわゆる石蓋土壇墓と呼ばれる簡単な構造の例であった。

9号墳の下層から検出されたもので、確実に弥生時代の遺構とみられるのは、石鏃を副葬していた第2主体である。下層とはしているものの、確認遺構面は他の埋葬施設と同じであるため、厳密には第2主体以外にも当該時期の遺構があるかもしれない。

本遺構は、2.10 m×1.05 mの墓壇規模を示し、その内部に1.45 m×0.5 mの棺の痕跡が確認され、棺底部分から2個の磨製石鏃と8個の打製石鏃が

検出された。石鏃としては完形ではなく、むしろ部分的に欠損しているものが目につく。

まとめ 石鏃や碧玉製管玉などから総合的に検討する必要があるが、出土土器から得られる年代観は中期初頭から中葉にかけての時期で、石鏃の年代とも矛盾はなかろう。

但馬地方はおろか、近隣の地域のなかでも古い時期の墓遺構であり、また低いというものの丘陵地の方形周溝墓としては例をみない。

また、先述のように駄坂川原遺跡を拠点集落とした集団の墓地であることもほぼ確実で、住居と墓地がセットで把握できる貴重な事例とすべきであろう。

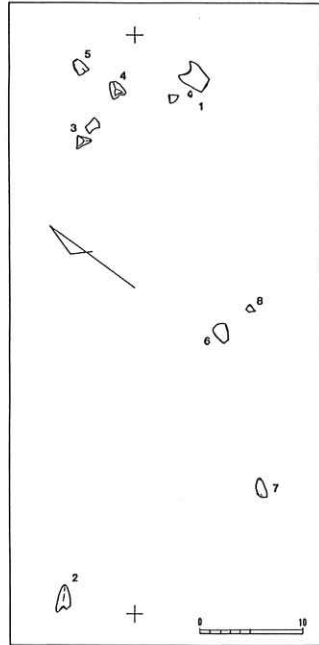


図46 舟隠9号墳下層埋葬施設
石鏃出土状況

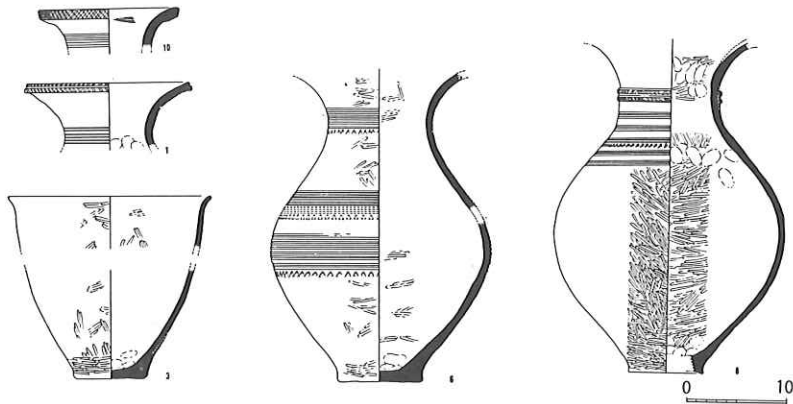


図47 駄坂舟隠遺跡周溝墓出土土器実測図

3.4 気比銅鐸出土地 気比字溝谷

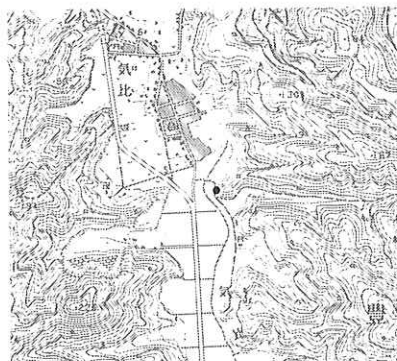


図48 気比銅鐸出土地位置図

契機 豊岡市気比で、まとめて4個の銅鐸が発見された。大正元年9月15日のことであり、考古学の知識が乏しかった当時のこと、気比地区は大変な騒動だったようである。

地元の小学校の建築用材を調達するための作業中、石工の岩井清右衛門が発見した。彼は、その一件書類を「銅鐸記録綴」として後世に残している。

銅鐸という貴重な遺物が、但馬地方で4個がほぼ完全なまま出土したことは、但馬地方の弥生時代を理解していくうえで重要なものである。岩井の記録によりながらたどってみよう。

立地 出土地は、尾根頂部から、ほぼ西向きに下降してきた狭く急傾斜な地形の先端部にあたる部分で、現状では気比川に突き出した独立した小さな岩山のような形で所在する。

出土した当時の地形は独立した小さい岩山であったようであるが、現在の地形から判断するところでは、上に述べた小尾根支脈が突出したその先端部にあたっていると理解される。

遺構 大正時代ということもあり、調査は実施されていない。観察記録が残されているのみである。

出土時にすでに大半が石材採取のために破壊されていたようで、発見者岩井の記憶をもとに、地元の県立豊岡中学校（現豊岡高校）の教頭の職にあった堀内清が大正2年1月に発表した「銅鐸の新発見」（『歴史地理』21巻1号）によって再現してみるしかない。

堀内の記録は、なによりも地元研究者がいち早く現地にとび、直接に発見者から事情を聴取し、地の利を生かした記述として高い資料的価値をもつ。それによると、

銅鐸の埋もれたりし場所は、右の仏像を刻せる巨岩の後背に於て、其の岩と之と相依れる他の二個の岩石とによりて、自然に小岩窟を形成したるところにして、…（中略）…底には河原石の径一二寸のもの及び貝殻（牡蠣及び螺の一種）を敷き、其の上に銅鐸を並べ、土を以て蔽ひ、東方の入口は更に他の石を以て塞ぎしもの如し。而して他に一物の存するものあるなし。……………（後略）……………

と記録されている。

多分、この発見の事情は大半が岩井からの伝聞によるものと考えられ、興味深い内容である。銅鐸の上には「四五尺許」の土があったというが、それが当初からのものか、それとも長年月の間に堆積したものかについては「明らかならず」と結論している。

次に銅鐸の出土状態であるが、近年になって復元的研究に新しい展開があった。紹介しておこう。井上洋一氏は、銅鐸4個の詳細な観察、特に錆の位置や発見時のキズなどを視点の中心におき、研究を進めた。氏が検討し、考えついた埋納の復元案は図のようなものである。

井上は、種々の検討のなかで「これらが必ずしも埋納当時のままであったとは言いきれないものがある」と結論し、気比銅鐸の出土状態を根拠にした銅鐸埋納論の展開には妥当性に疑問があることを指摘する。

氏自身はふれていないが、銅鐸を埋納する場所に貝殻を敷くという行為

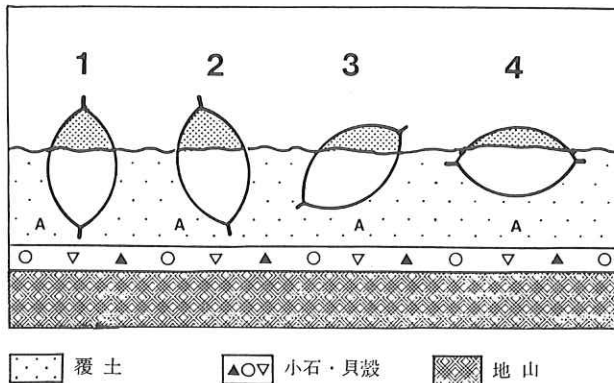


図49 気比銅鐸出土状況復元想定図

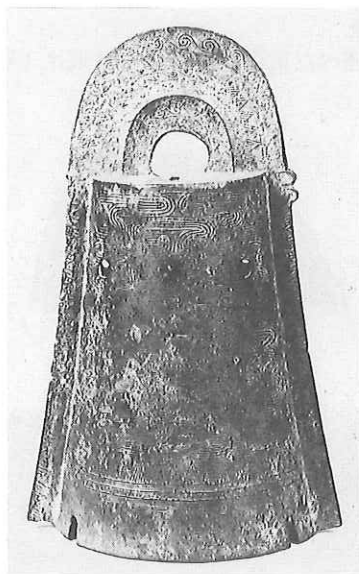
などが、はたして弥生人の仕業なのか、なんらかの理由で再度埋納された際の作業であればそのような行為は民俗例で見られるのかなど、今後の類例の発見にまたなくてはならない部分が多い。いずれにせよ、解釈論から一歩進んだ気比銅鐸研究の到達点ではあろう。

遺物 遺物は、上の記述にもあるように銅鐸4個があるのみで、その他は自然遺物としての貝類があった程度である。個々の銅鐸について説明を加える。それぞれの規模は下に一覧した。

1号鐸 A面鐸身は中央部の右向きシカの列の文様で、B面は連続する

表1 気比銅鐸一覧

名称	総高 cm	鐸身高 cm	裾部径 cm	重量 kg
1号銅鐸	45.9	32.4	23.9×16.5	6.260
2号銅鐸	45.2	33.0	23.8×17.7	4.938
3号銅鐸	44.3	31.7	23.3×16.6	6.120
4号銅鐸	44.5	33.3	23.6×17.1	6.110



写21 気比1号銅鐸



写22 気比2号銅鐸

渦文の帯によって上下に分けられる。鈕（つり手部分）のA面には鋸文とは虫類らしい文様がみられる。飾耳は、鈕の付け根の部分に一对作られている。鐸身は、全体に流水文で飾られている。

2号鐸 鐸身は、綾杉文帯によって上下に区切られ、全体に流水文が多用されている。鐸身や鐸の一部に鑄かけの痕跡がみられる。A面鐸身の文様のなかには、鑄上がり悪さをなおすため補刻した部分もある。A面鈕部分には、判然とはしないが1匹の動物絵画が認められる。飾耳は3対。

3号鐸 鐸身は、連続する渦文帯によって4区に区画されている。区画内は流水文で満たされているが、全体としては文様は不鮮明である。鈕部分にはシカの列がみられる。

本銅鐸は、後に述べる茨木市東奈良遺跡出土の鑄型によって作られていることが判明している。鐸面には、鑄型の文様にあったトンボ、魚のほか人物とカメなどがみられる。飾耳はない。

4号鐸 鐸身は、A面はシカ列と連続渦文帯によって、B面は2条の連続渦文帯によってそれぞれ3区に区画されている。鐸身は全体に流水文で埋められており、飾り耳は一对のみである。

銅鐸鑄型 市内出土ではないが、上に述べた東奈良遺跡からは気比3号銅

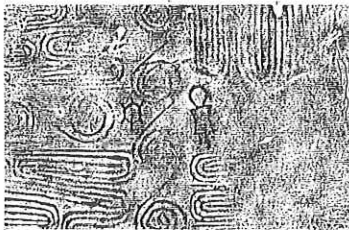


図50 気比3号銅鐸部分拓影

図51 気比4号銅鐸部分拓影

鐸の砂岩製鋳型が出土している。昭和49年に発見されたもので、関連する遺物としてここで紹介する。縦7.3cm・横6cmの小さい破片で、文様構成から3号銅鐸の鋳型であることが確認されたのである。

東奈良遺跡からは、図に示すように出土地の判明している銅鐸を铸造した鋳型が別に出土しており、すくなくともある時期に一定程度の銅鐸を作り、ここから各地に配布されていることは確実といえよう。

まとめ 銅鐸の古式のもの、石製鋳型で作られたことが確実で、鐸に残されたキズや鋳かけの痕跡などの検討で、同一鋳型を用いて作った銅鐸、すなわち兄弟関係にある銅鐸の存在が知られている。たとえば、気比4号銅鐸は現在の堺市出土銅鐸や明治大学所蔵銅鐸と同一鋳型で作られていることが判明している。ただ、その後の詳細な観察で、後者は別の鋳型もしくは「手直し型」による可能性も論じられている。

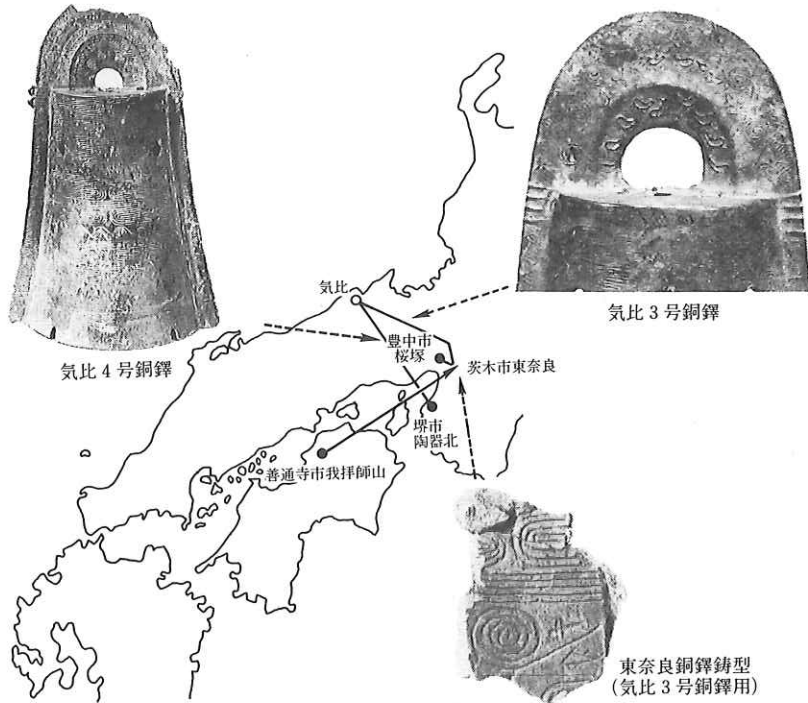


図52 気比銅鐸生産・配布関連図

3.5 加陽遺跡 加陽字宮ノ下

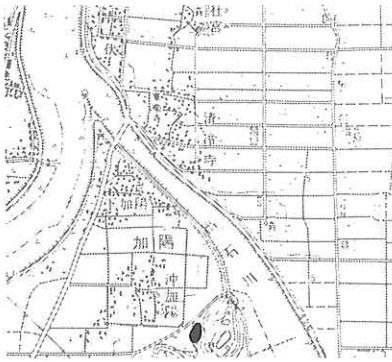


図53 加陽遺跡位置図

契機 昭和55年8月と11月の2次にわたって、広域営農団地農道新設工事に伴い県教育委員会の手で確認調査が実施されたものである。

事前の調査依頼を受けた市教育委員会が分布調査をおこなったところ、当該地付近に若干の遺物散布地が認められたことによるものである。

調査の概要が発表されているので、以下、若干の説明をしておく。

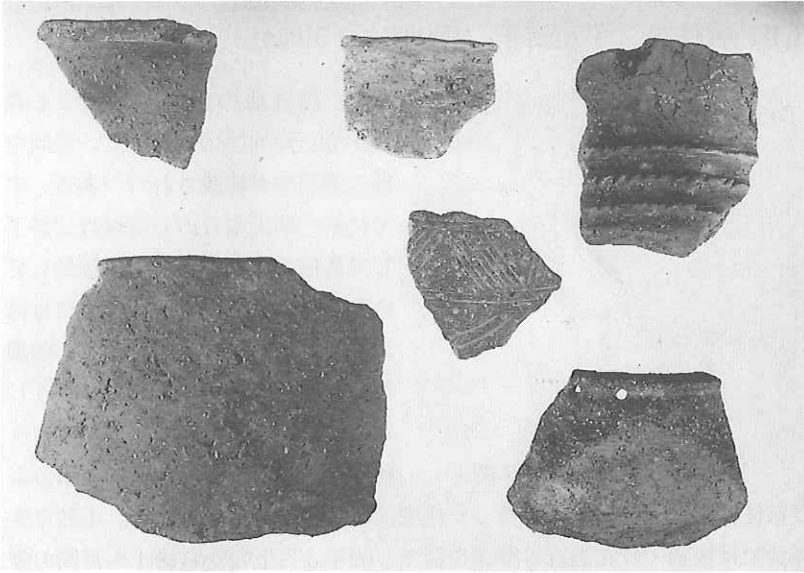
立地 遺跡は、盆地南部の加陽地区南東方向にあるダイチ山山裾に位置する。遺跡の北600m付近は、円山川と出石川の合流点となっている。遺跡の現況であるが、墓地や畑地として後世の改変が著しく、階段状の地形を呈している。もとは、山裾の緩やかな斜面に立地する遺跡ということになる。

遺構 確認調査と、この結果を踏まえて一部拡張して本調査が実施された。まず、確認調査では2m四方の広さ、深さ2mのテストピットが掘られ、その基本的な土層は8層に分層されており、比較的大量の遺物が出土したもの、狭い範囲のため明瞭な形で遺構が確認されるには至らなかった。そのために、2次調査では一部でトレンチ調査が実施された。

古墳時代中期およびそれ以前の時期の土器を包含する層に、ピットや石組などが検出され、確認できた最も下層では弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式期）の土器片とともに、碧玉製管玉の未製品がみつかっており、注目される。

遺物 遺物は、古いものでは弥生時代中期前半、新しいものでは鎌倉時代ころまでの遺物が出土している。しかし、遺物の主体となるのは古墳時代中期の土師器である。

まとめ 今回の調査によると、遺跡の性格を明瞭に示すような遺構や遺物の出土はなかった。しかし、大量に出土している点や、時期が各期、長期



写23 出石川川床採集弥生土器

にわたっているところから、近隣に安定したなんらかの遺跡の存在が考えられる。市域の弥生遺跡では、貴重な中期初頭の遺物を包含する例である。

なお、昭和60年に付近の円山川と支流の出石川の合流点近くの天神橋付け替え工事に関係して、多数の土器片が児童によって採集された。それを契機に橋の上流約100mの地点に新たな遺物散布地が川中で見つかった。市教育委員会職員や調査補助員などが現地へ赴き、弥生時代前期の所産らしい破片を含む土器片を採集している。

立地 出石川に堆積した砂のなかから採集されたものである。両河川の合流地は自然堤防が発達しており、沖加陽地区付近に本来の遺跡が求められるかもしれない。

遺構 遺構は、当然確認されていない。

遺物 弥生土器は、総数ではかなりの点数が採集されており、胎土の粗さなどを観察すると前期にさかのぼる可能性のある遺物もある。

まとめ 基本的な性格は大磯地区で採集されているものと同じであろうが、時期的に前期に属する可能性があり、古いことが注目される。

3.6 香住エノ田遺跡群 香住字エノ田ほか

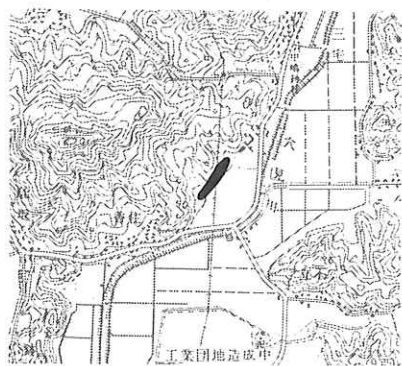


図54 香住エノ田遺跡群位置図

契機 調査地の南東に対面する森尾・立石両地区の丘陵部に、豊岡中核工業団地が建設されつつある。すでに第一期工事分の分譲はほぼ終了して各種の工場が完成し、稼働している状態である。平成2年度には第二期造成工事に着手しており、順調な分譲の見込みもたっている。こうした背景から、工業団地に近いという

利点もあって、香住地区内に市および県住宅供給公社が主体となった住宅団地の建設が計画された。市教育委員会では協議・分布調査の実施を経て、62年5月下旬から約1か月間の確認調査を実施した。その後も調査は継続して実施され、種々の成果を上げてきた。ここでは、ほぼ弥生期のものとみられるいくつかの遺構について記述する。

立地 II区は、C地点の尾根下方の水田部に設定した南北に長い調査区である。水田面の標高は5.1~6.1mを測り、調査した面積は約230m²である。なお、北側に隣接して設定していたI区は遺構の存在を確認した段階で調査を中断している。

IV区は、S地点の下方の山裾部分に設定した調査区で、II区からは北東方向に約100m離れた位置で、標高4.5~5mを測る水田を掘り下げたものである。調査面積は約340m²であった。

II区の調査

遺構 II区の中央部から検出した弥生時代の円形竪穴住居址で、古墳時代前期頃の溝3によって切り込まれている。遺存状態は溝3のコーナー部から東側が良好に残っているが、これは地形の高い側にあたり、地山を明確に掘り込んでいた部分である。それ以外は十分に把握できなかった。



写24 IV区の竪穴式住居址（香住エノ田遺跡群井走遺跡）

IV区の調査

遺構 IV区からは奈良～平安時代の掘立柱建物群および井戸1基のほかに、弥生時代中期前半の竪穴住居址を1棟検出したほか、後期の包含層を認めた。山裾の縁辺部にあたり、現状では非常に低湿な水田地となっていたにもかかわらず、住居が存在していたわけである。なお遺構面の標高は3.5～4.5 mである。

弥生中期第Ⅲ様式ころの円形竪穴住居址は、山裾の傾斜地を径8.5 mに掘り込んでおり、山側の深い部分では壁高が1 mほどである。床面はほぼ水平で、壁溝が二重に検出されたことから拡張を1回おこなっていることが判明する。当初の住居の規模は、床面径で約6.6 mを測り、拡張後は同8.2 mと大型になっている。

支柱穴は壁溝にそって並ぶタイプのもので、拡張に伴って外側に新たに設けている。当初の住居に比較して柱間が狭くなっていて、支柱穴を増やしているようである。

遺物 床面には、中央土壌の南西側や北側などに炭化物の遺存が認められた。なかには幅10～15 cm、長さ1 mの建築部材かと思われるものがある。

る。また中央土壌の北西約1.5mには室内の作業用の台石と考えられる石材が、径30cmのものと同様よりやや小型のものと二つが並んでいた。さらに北東に1mの位置には40cm×15cmの石皿ないし砥石とみられる製品が砥面を下にして出土した。土器は少なく、器形の明らかなものとしては床面から壺、壁溝にそってやや浮いた状態で甕が出ている。

このほかの遺物として石鋸・叩石・砥石・石錐・小型打製石斧・サヌカイト片などがある。このうち紅簾石石英片岩製の石鋸は、玉作りにおける原石の分割に用いられる「玉鋸」と考えられる。

II区の調査では、碧玉原石に擦り切り施溝をもつ管玉未製品とやはり紅簾石石英片岩の石鋸が出ていることから、確実に本遺跡内での玉生産を裏付ける資料であろう。その後、次に述べるO地点の調査によってまとまった量の管玉未製品がみつき、さらに資料の充実があった。

本住居地の時期は、出土した土器からみて弥生時代中期前半ころであろう。なお住居地上の遺物包含層では後期の土器が大量に出土していることから、ごく近い周辺に後期の住居地が存在することは確実である。

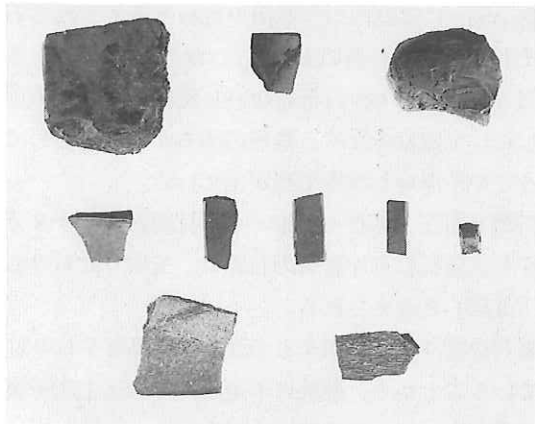
O地点の調査

O地点の調査は神美地区集落基幹センターの設置に伴って実施したもので、IV区から北西約70mの山裾水田部を約400m²調査した。遺構面の標高は5.5m内外を測る。ここからは古墳時代前期頃を主体として、弥生時代中期後半から奈良・平安までの遺物が出土している。

遺構 弥生時代の確実なものは検出できなかったが、包含層内や新しい遺構の埋土中などから碧玉の管玉未製品や石鋸片がみつかったのでふれておきたい。

遺物 玉作り関連の遺物として、碧玉材未製品8点と紅簾石石英片岩の石鋸1点が出ている。その他、碧玉材の破片と同様の石質で赤色を呈した鉄石英の破片が若干ある。砥石は数点出土しているが、玉生産とのかかわりは不明確なものである。

未製品は、拳大程度のお原石に自然面から擦り切り施溝を施して分割し、さらに次の工程である板状剥片を作出すべく分割面を研いでいる段階のも



写25 玉生産関係遺物（香住エノ田遺跡群井走遺跡）

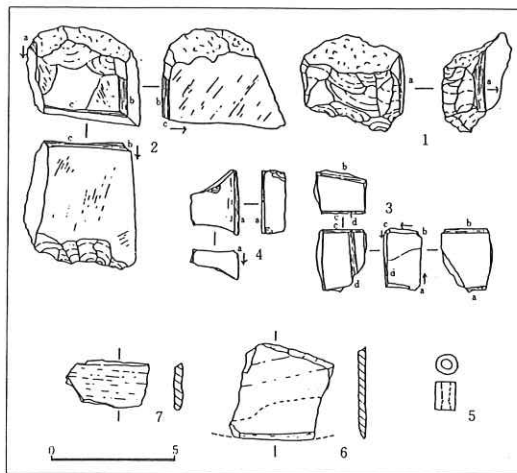


図56 同上実測図

のが1点ある。また、管玉の原形となる角柱体を作成する分割段階が観察できるものが5点、一応の角柱体とみられるもの2点である。この後の工程である「多柱体に加工」しているものや穿孔のみられる段階などは未発見である。

このように、全工程をたどれないという難点はあるものの、一括遺物群の出土は意義深いことであった。所属の時期については、確実な伴出遺物がないものの包含層の遺物などから弥生時代後期である可能性が高い。

まとめ 一連のエノ田遺跡群内の調査についてふれてきたが、中期III様式および後期前葉

頃の竪穴式住居址の検出とともに、但馬で具体的に存在が明らかとなった玉生産関連遺物の出土などに大きな成果がみられる。かつて但馬の二、三の遺跡で玉生産の可能性が指摘されていたが、今回の資料によってその存在は確実なものとなった。玉作りといえば、丹後地方や北陸地方、また鳥取や島根方面との交流といった問題も今後浮上してこよう。

3.7 女代神社遺跡 九日市上町字宮ノ下

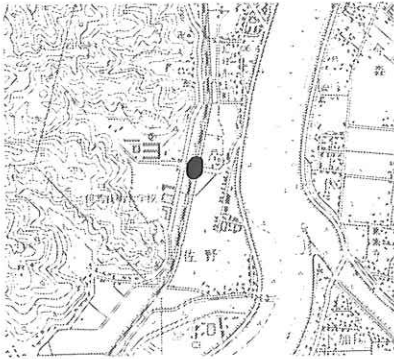


図57 女代神社遺跡位置図

契機 昭和47年5月、県立豊岡農業高校（現・豊岡南高校）への取り合い道路が当時の山陰線下を通過する工事中に、大量の土器片が出土するにおよんで遺跡の存在が判明した。しかし、それ以前から遺物の出土はあったし、大量に出土した前後の路線部分では3月に確認調査がなされていた。

遺物の大量出土があったことや確認調査の勝手際などの反省もあって、市教育委員会では11月に範囲を確定する目的で調査を実施した。

立地 豊岡盆地の南西、円山川と出石川の合流点付近に位置し、式内社の女代神社直近の地である。標高3mから4m程度の低地であり、現状は田畑である。付近の尾根上には、時期的には異なるが古墳が密集している。

遺構 鉄道の西側（A区）に3個、東側（B区）に3個の計6個のテストピットを設定した。調査時期が晩秋にかかるところで、不十分な調査ではあったが比較的多くの弥生土器が検出されたこと、土層状態の解明などの点で成果があった。

調査の結果、遺構の検出はなかった。土層を観察したのみである。

A区の土層状況は、上から耕土・白黄色土・黄褐色土・黒色有機質土・黒色粘質土・青灰色砂層となっており、第2層、第3層からは新しい時期の陶器をはじめ、須恵器・土師器・弥生土器が出土し、第4層の黒色有機質土層から弥生土器と土師器が多数検出されており、この層には須恵器が含まれていない。また、第5層からは遺物の出土はなかった。

B区の土層は、耕土・黒褐色土層・黒色有機質土層・青灰色砂層となっており、やや異なっている。しかし、土器の出土状態はABとも大きな差はない。

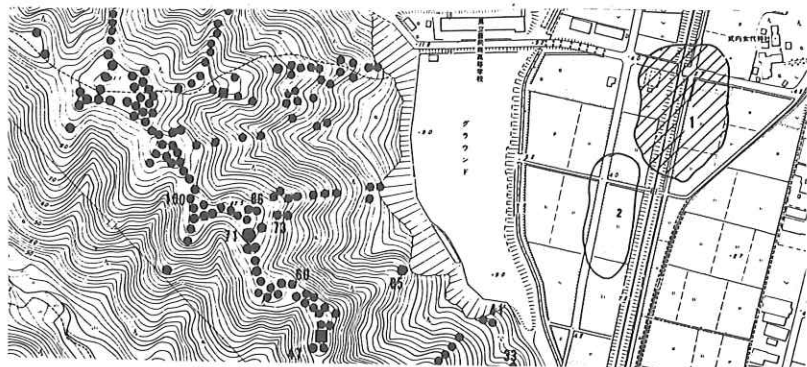


図58 女代神社遺跡と付近の古墳群

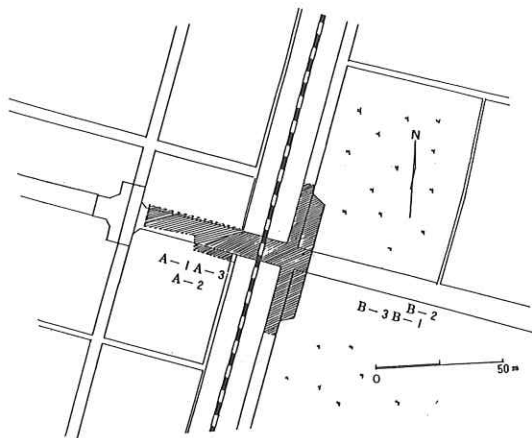


図59 女代神社遺跡調査箇所設定図

遺物 弥生土器と土師器が中心であった。弥生土器は、畿内第IV様式期から第V様式期のものが大半で、器種は甕・壺・高坏・鉢など全般にわたっている。土師器も、須恵器を伴わない古式のものである。

遺物は、工事中の採集で銅鏡様の金属器・石器が出土している。前者は、上巻でもふれておいたが、直径3.1cmのほぼ円形を呈し、中央部に鈕状の突起や円孔が認められる。円孔は鈕が用をなさなくなった時点で後補したのかも知れないが、突起は意味不詳である。ここでは、無文の銅鏡の可能性を指摘するにとどめたい。

まとめ 調査では遺構を検出することはできなかったが、遺物は全体としてB区に多く、したがって遺跡は鉄道下を中心とする範囲を大きく出るものではなからう。

しかし、その部分が本来の遺跡とは考えにくく、たとえば、円山川が形成した自然堤防上か山裾など現地から近い位置に拠点的な遺跡があるものと推定される。今後の研究にまちたい。



写26 女代神社遺跡出土銅鏡様遺物

また、これらとは別に山裾でも石斧が採集されているところから、付近に別の遺跡がある可能性も強い。さらに、遺跡の北方にある民家の地下から土器が出土したという情報もあるところから、遺跡の範囲もさらに広がるかもしれない。

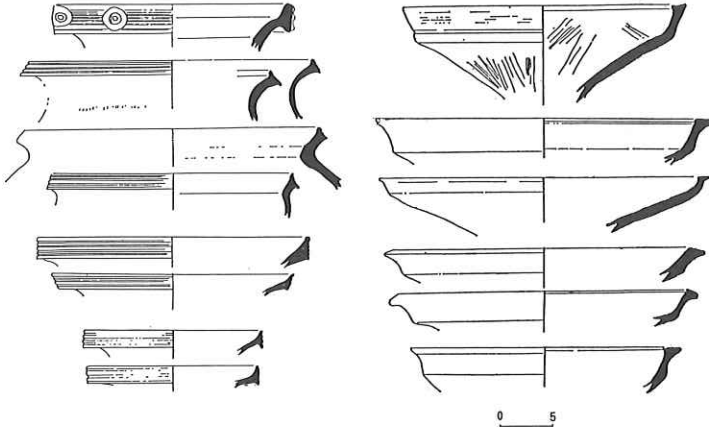


図60 女代神社遺跡出土弥生土器実測図

3.8 女代銅鐸出土地 九日市上ノ町字遠ノ下

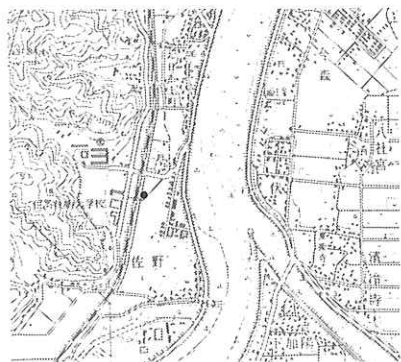


図61 女代銅鐸出土地位置図

契機 平成2年度事業として、豊岡市下水道課が発注し工事が進められていた「八条1号雨水幹線整備工事」現場において、工事の上げ土に土器片が含まれている事実が市教育委員会に知らされた。遺物の発見は、豊岡南高校生であった。3年1月末のことである。

当該地は、昭和47年に県立豊岡農業高校（現・豊岡南高校）への取り

合い道路として山陰線下の工事中に大量の土器片が出土した女代神社遺跡、あるいは県立但馬技術大学校テニスコートとなっている同南遺跡の隣接地であったために、遺跡近くの掘削に際しては工事中立合い等をおこなっていたものである。高校生からの知らせで現場に急行し、市教委担当者の手で銅鐸片は採集された。

立地 遺跡は、標高4m程度の低湿地でJR山陰線の東添いの水田部の一角である。旧地形については今のところ知る資料がないが、自然堤防様の微高地が存在していたのであろうか。

遺構 遺物の発見に伴って簡単な坪掘り調査を、重機を用いて実施した。表土下約1m内外に遺物を包含する褐色を帯びた層が認められ、その下部では砂泥質層となることなどが判明した。層の状態や遺物量が比較的少ないことなどから、発見場所が遺構本体の位置とは考えにくく、ごく近くに自然堤防上についた遺跡が埋没しているのであろう。

遺物 銅鐸片のほかに石器や土器片が見つかっている。これらの時期は弥生時代中期前葉から平安時代までのもので、ここでは銅鐸片のみについて説明する。

破片は、銅鐸の側面に取り付く鱗の一方の下端部分である。両面に文様が鋳出されており、表面は緑青がふいて、淡い緑色を呈している。文様は

明確に観察でき、2条の突線で縁取りがされた内部に鋸歯状の文様が11単位連続している。破片の中ほどの外部には、半円を2個並べた飾り耳が付いている。

本体の長さは約13 cm、幅約2 cm、厚み1.5~3 mmを測り、飾り耳は幅2 cm、高さ1.3 cmのものが2連取り付いている。重さは約40 gであった。上端の折れ曲がりには比較的新しい可能性もあるが、本体と接合していた部分の破断面の状態をみると鑄も古く、破損の際の力の作用からか一方にわずかな盛り上がり（歪み）が観察できる。こうしたことから、意識的に破砕された銅鐸の例（いわゆる破砕銅鐸）である可能性がきわめて強い。



写27 女代銅鐸



図62 同拓影

まとめ 銅鐸の種類としては新しい形式で、突線鈕式と呼ばれるものだが、その形式内では比較的古い段階のものとされる。具体的には、突線鈕II式という段階のもので、弥生時代後期の前半に製作されたと考えられているものである。

今まで出土している例では、ケルン市立東アジア美術館蔵の袈裟襷紋銅鐸が近い形式である。

破片1点のため資料不足だが、50~60 cm程度の還元高になり、この段階の例としてはかなり小型である。聞く銅鐸から見る銅鐸への変換時期の資料として貴重な例である。時期的には気比銅鐸より新しく、日高町久田谷銅鐸より古く位置付けられ、但馬地方では新形式の銅鐸である。

破片で見つかった例は全国に約20例あり、突如銅鐸が用いられなくなるこの意味を考える上で、こうした破砕銅鐸の実態が注目されている。今回の銅鐸はそうした例のうちでは製作時期が古いものである。

3.9 亀ヶ崎遺跡 福田字亀ヶ崎など

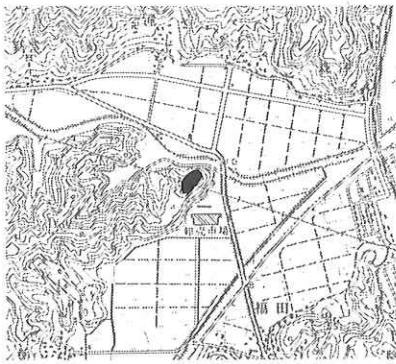


図63 亀ヶ崎遺跡位置図

契機 豊岡市の不燃物処理場の建設に伴って、昭和55・56両年に発掘調査が実施されたものである。調査の対象となったのは古墳8基と中世の砦址である亀ヶ崎城であったが、表土剥ぎ作業中に弥生土器が認められ、注意して調査を進めたところ、その下層から亀ヶ崎遺跡の名称で呼ぶ弥生時代中期の住居址が検出された。

砦の遺構としては2間×3間程度の掘立柱建物があったが、弥生時代の遺構はそれに重なる形でみつかった。立地 標高61mあまりの低い丘陵であるが、遺跡が立地する場所は斜面が急峻で山城がある場所にふさわしく、豊岡盆地が見渡せる眺望の良好な位置を占めている。また、当地点は、奈佐谷や大浜谷の出口、円山川と奈佐川の合流点を抑える地点にあたり、交通の要衝である。

遺構 弥生時代に属する遺構は、砦の遺構と重なっていたためにかかわらずしも良好な遺存状態ではなかったが、住居址が1棟検出された。

直径4m、幅10~20cm程度の壁溝が一部で残っていた。住居址に伴うとみられる柱穴(ピット)も確認されている。

近辺からは、弥生土器がわずかではあるがみつき、住居址中央部に認められた凹みには、こぶしよりやや小さい川原石が36個置かれていた。

遺物 弥生時代に属する遺物のうち、土器については中期後半の特徴を示すものである。また、石製品も少数であったが検出され、時期に矛盾は認められない。

まとめ 弥生時代中期の山の上の遺跡として、市域では次に述べる中郷・深谷遺跡などととも注目すべき高地性の遺跡である。立地から考えて、日常生活がこの場所で通常におこなわれていたとは理解しにくい。

当時、各地で人々の間に土地やコメをめぐる緊張関係が生じ、もっぱ

ら防衛のための城として、通常の生活の場とは別に“高地性集落”や“高地性住居”が“逃げ城”や“見張り場”としての目的で造られたと説明される。そうした遺跡が、当地域にも認められる点で貴重である。



写28 亀ヶ崎遺跡の立地

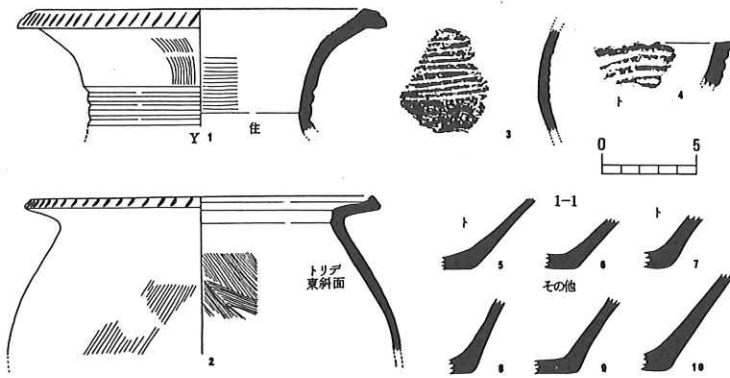


図64 亀ヶ崎遺跡出土弥生土器実測図

3.10 中ノ郷深谷遺跡 中ノ郷字深谷

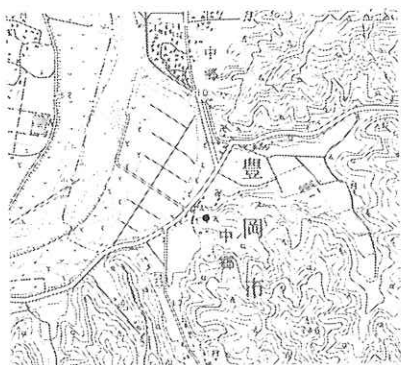


図65 中ノ郷深谷遺跡位置図

契機 土取り工事の関係者から、危険防止のため、個人の住宅の裏山を処理したいとして事前に分布調査の依頼があり、調査の結果、遺跡の存在が判明したため国庫補助事業で緊急確認調査を実施した。昭和58年のことである。

調査は、当初2基の古墳がその対象となったが、最終的には中世の墓、火葬場、古墳2基（埋葬施設は多数）、弥生時代の住居址と溝が検出された。ここでは、弥生時代の遺構と遺物について説明する。

立地 遺跡付近には多数の古墳が密集している。丘陵の先端部に位置する遺跡で、円山川が形成した沖積地をすぐ下に見下ろす標高31mの小高い



写29 中ノ郷深谷遺跡竪穴住居址

丘陵突端部である。

遺構 上層の古墳の調査中に確認された。1号墳と呼ぶ21 m×13.5 m あまりの大型方墳（長方形）の下層からみつかった遺跡で、直径8 mの円形住居址である。竪穴住居は、当初6.5 m程度の規模で造られた模様で、2度の立替もしくは拡張、あるいは重複して建立がなされているようである。

住居址の中央部には、炉と想定される遺構が認められた。上面が80 cmから1 m程度の規模で、壁はよく焼けていた。炉部分からは壁溝に向かって4本の溝が検出されている。排水もしくは間仕切のためのものと考えられる。

遺物の出土状況であるが、住居址に伴う形で出土した遺物は少ない。しかし、弥生時代の遺物は中期後半を示しており、短期間の生活が営まれた

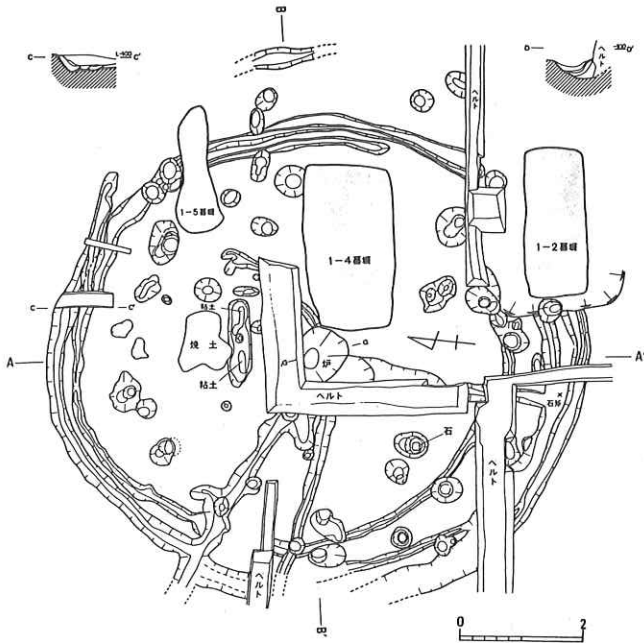


図66 中ノ郷深谷遺跡竪穴住居址実測図

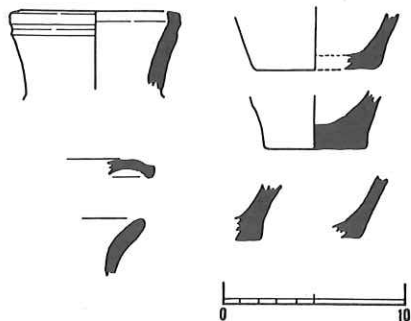


図67 中ノ郷深谷遺跡出土弥生土器実測図

いずれも無茎式のものである。細分すると平基式と凸基式がある。大きいもので、長さ2.9 cmである。

注目される石器として、次の打製石包丁状石器を紹介しておく。この遺物は破片であるが、断面が楔形を呈し、刃部分には細かい剝離面が認められること、一部に磨滅の痕跡がみられる。石材は紅簾雲母石英片岩と呼ばれるもので、関東・紀伊・四国地方に認められる石材であるが、県下では産出するものではない。玉原石は出土していないが、玉作りの道具である石鋸と呼ばれる遺物である可能性が強い。

まとめ 本遺跡は、中期後半に属するやや高い位置に立地する遺跡である。古墳の下層に重複して存在したため調査が不十分なものとなったが、住居が拡張ないし建て替えられていることや、いわゆる紅簾片岩の出土から玉生産や紀伊・四国方面との交流の問題が生じた。

遺跡は、立地に着目すれば“見張場”のような性格が想定できるが、亀ヶ崎遺跡ほどの高所でない本例は、通常の住居の1棟が検出されたとみておく方が適当であろう。

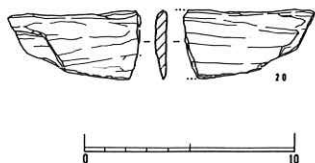


図68 中ノ郷深谷遺跡出土石鋸実測図

のであろう。

遺物 土器片のほかに、打製石斧・石鏃・磨製石斧・紡錘車などが検出されている。土器は細片が多いため、詳細は不明であるがおおむね中期後半（畿内第IV様式）の時期を示す。

石鏃は計10点出土した。サヌカイトを材料とするもので